



日本現代文學全集・講談社版 70

中野重治集 小林多喜二

編集 藤 勝 一 整 郎
伊 井 村 光 夫
龜 野 謙
中 本 健 吉
山

日本現代文學全集

70

中野重治・小林多喜二集

編集

伊藤 整
龜井 勝一郎
中村 光夫
平野 謙
山本 健吉



昭和38年8月10日 印刷
昭和38年8月19日 發行

定價 500圓

© KODANSHA 1963

著

者

なか の しげ はる
中 野 重 治
こ ばやし た き じ
小 林 多 喜 二

發行者 野間省一

印刷者 北島織衛

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽町3-19
電話東京 (941) 3111(大代表)
振替 東京 3 9 3 0

印刷製本
寫版製本
眞印
製函
背革
表紙クロス
口繪用紙
本文用紙
函貼用紙
見返し用紙
扉用紙

大日本印刷株式會社
株式會社 興陽社
和田製本工業株式會社
株式會社 岡山紙器所
株式會社 第一紙藝社
厚川株式會社
日本クロス工業株式會社
日本加工製紙株式會社
本州製紙株式會社
安倍川工業株式會社
三菱製紙株式會社
神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りか

中野重治集 目次

巻頭写真

筆 蹟

春さきの風	五
鉄の話	一〇
村の家	一六
汽車の罐焚き	三
歌のわかれ	七
五勺の酒	一四
むらぎも	一九
広 重	二六

荒れた屋敷	二六
-------	----

萩のもんかきや	二九
---------	----

作品解説	平野 謙 四〇
------	---------

中野重治入門	小田切秀雄 四七
--------	----------

年 譜	四六
-----	----

参考文献	四七
------	----

小林多喜二集 目次

卷頭写真

筆 蹟

防雪林……………二九

一九二八年三月十五日……………三〇

救援ニュース No. 18 附録……………三〇

独 房……………三六

母たち……………四〇

党生活者……………四七

作品解説……………平野 謙 三〇

小林多喜二入門……………小田切秀雄 三〇

年 譜……………四三

参考文献……………四六

中野重治集

春さきの風

三月十五日につかまつた人々のなかに一人の赤ん坊がいた。

朝の八時半ごろ、赤ん坊は父親と母親とに連れられて、六人の制服と二人の私服と一しよに家の前の溝板を渡った。夏場はこの溝板がごとごとというのだが、この時はすっかり凍てついていて悲しげなきしみ声を立てた。

十一人の同勢は電車道を歩いて行つた。誰も口を利かなかつた。

曇り日で、彼らの足の下では霜柱が踏み砕かれた。五時から八時半までの家宅搜索の間に赤ん坊は十分に冷えていた。母親のふところの中で赤ん坊は泣き声を立てなかつた。警察の門へ曲る時ふいと顔を上げると、浄水場の堤防に咲いたかじかんだタンポポの花が父親の眼に映つた。

中へはいると直ぐ父親はどこかへ連れて行かれた。赤ん坊は母親と一しよに保護檻に入れられた。

そこに二人の淫売婦がいた。

このごろ子供を亡くした年上の方がしきりに赤ん坊を可愛がりたがつた。

淫売婦らは昼少し前に出された。淫売婦らは赤ん坊の頬べたをつついて二口三口お愛想を言い、母親には「お大事になさいまし。」と挨拶して出て行つた。

屋過ぎ仲間うちの検束者が十五六人はいつて来た。そのうちの女二人が保護檻に入れられた。

女らは赤ん坊を囲んであととの打合せを始めた。ひそひそ声であつたが、看守部屋が保護檻の鼻先にあつたため忽ちけんつくを喰つた。

「しゃべるな！」

赤ん坊がおびえて泣き出した。いくらどうしても泣き止めなかつた。

「どうしたのよう、この児は？」

母親は赤ん坊のからだ心が心配になり、それから悲しくなつた。最後に母親は決心した。

（泣かしてやれ。）

女らは赤ん坊の泣き声に隠れて辛うじて話した。

しかし母親が呼び出された。

赤ん坊はまだ泣き立てていた。それを聞いていると母親は、底冷えのする留置所の中でさえ鼻の頭に汗の浮くのを覚えた。

（けれど赤ん坊を連れて行つては二人に話ができなからう……）

母親は赤ん坊を置いて行くことにした。

附添いの看守が訊ねた。

「赤ん坊は連れて行かんのか？」

母親はちらりと看守の顔を見たが黙って出て行つた。

入れちがいに父親がはいつて来た。泣き声を聞きつけて彼は、保護檻の格子の外から赤ん坊の泣き顔を覗き込み、それから二人の女に会釈して便所わきの檻房にはいった。

陰気で退屈な留置所の午後が過ぎていった。一度看守がひどく猥褻な言葉で保護檻の女をからかった時、誰かが檻房の中から堪りかねて怒鳴つた。

「止せ、馬鹿！」

夕刻になって母親は帰つて来た。二人が訊ねた。

「どうして？」

母親は胸をあけて乳房を含ませながらいった。

「さ、おっぱいにしようかね。」

ふいに母親は着ぎめた。

母親は乳の出ないのを発見した。

同時に赤ん坊の様子のおかしいのに気づいた。

赤ん坊は機嫌が悪いくせに泣かなかった。おしゃぶりを含ませる
とじきに吐き出した。母親は赤ん坊の小さなからだを揺すぶりなが
ら呼び立てた。

「友ちゃん！ 友ちゃん！」

赤ん坊はけれど泣かなかった。額に手を当てると少しだが熱があ
った。

母親は医者を呼んでもらおうと思った。

「医者を呼んでくれませんか？」

「医者？ 何にするんだ？」

「子供の加減が悪いんです。」

看守はぶつぶつ言いながら出て行った。いくら待っても帰らな
かった。

そのうち赤ん坊の呼吸が多くなってきた。母親はもう一人の看守
に訴えた。

「すみませんが、医者はどうなったんか見て来て下さい。お願い
します。」

看守は取り合わなかった。

「心配することはないよ。」

四五十分もたった頃ようやくさっきの看守が帰って来ていった。

「警察医はもう帰っちゃったのだよ。」

警察医というものが警察に詰めているものかどうか母親は知ら
なかった。

「ほかの医者を呼んで頂けませんでしょうか？」

「呼んで呼べないことはないがね。金は持ってるか？」

「持ってません。」

「それや困ったなあ。外から呼ぶと金を払わなくちゃなんねんだ。」
誰かが檻房の中からいった。

「金は俺が持ってるよ。」

看守がその檻房の前へ歩いて行った。

「それや君だめだよ。中で金の貸し借りはいっさい許されねんだ。」

「許すも許さないもないじゃないか？ 赤ん坊は病気なんだぜ。」

「そう君、僕を虐めたって仕方がないよ。」

「虐める？……チェッ！」 檻房の中の男は噛み切れるほど舌打ちし
た、「どうするんだ、死んだら？」

その時その隣の檻房から父親が言いかけた。

「ちよつと……君……」

そのとき母親が叫んだ。

「呼んで下さい！ 呼んで下さい！」

留置所じゅうが聴き耳を立てた。看守は保護檻を覗き込んだ。赤
ん坊の口許に泡が見えた。

看守はあわてた。連れの看守に何か耳打ちすると彼は急いで
出て行った。すぐ医者が来た。

母親や女たちが容態を訊ねると、血が頭に上ったのだとだけい
って医者は看守部屋に隠れた。そこへ房外の戸をあけて、意外なこ
とに署長がはいって来た。もう夜中の一時を廻っていた。署長と医者
とは向い合わせに屈み込んでひそひそ話していた。その間が母親に
非常に長く思われた。とうとう二人が椅子を立った。母親は彼らが
立ち上りながらいうのを聞いた。

「駄目かね？」

「直ぐ出さなければいけません……」

母親は頭のなかで大きな水車が廻るような気がした。それから手
足がしびれ鳩尾の落ち込むを感じた。看守が何かいったが聞えな
かった。ただしっかりしていなければいけないとそればかり考えて
いた。

俾が来て、母親と赤ん坊とがそれに乗り——昨日の朝——しかし今朝としか思えなかった——来た道をそろそろと引かれて行った。父親と、やはり六人の制服と、二人の私服とがその後に蹤いて行った。

俾は途中で医者を起すために一度とまった。

家へつくともなく医者が来た。

もう夜が明けていた。

水を買って来て頭と胸とを冷し、裾の方へ湯たんぽを入れた。

親たちは赤ん坊の枕もとに坐つて、小さな胸に注射針が刺されるのを見守り、その筒数を腹のなかで数えた。

医者は三十分ばかり様子を見ていた。

赤ん坊は眼をつぶったまま少しも泣かなかつた。

医者に訊くと消化不良だといった。

九時頃、手当の注意をしておいて医者は帰った。薬は母親が取りに行った。

十時頃警察から父親を呼びに来た。父親はしかし直ぐ帰つて来た。

十一時頃赤ん坊は眼を開いた。そして口をもぐもぐさしたかと思ふと薬を吐き出した。小さな舌で何度も押し出すようにして唇をつぼめつぼめた。

その頃から赤ん坊のからだが冷え始めた。湯たんぽは用をなさなくなつた。そのじりじり冷えていく冷え方は全く手がつかなくなつた。

医者がもう一度呼ばれた。

医者の言葉で相談の結果、母親が、父親の妹の嫁ぎ先へ電報を打ちに行った。打ちたくない、しかし打つとすればそこよりないただ一つの宛先だつた。

「ハナシアルキテクレ」

郵便局から帰つて来て闕をまたぐと父親がいつた。

「駄目だつた！」

そして追いかけて慰め顔にいつた。

「苦しみはしなかつたよ。」

触つてみると赤ん坊はまだ温かつた。一貫目買った水がまだ残つていた。母親は、警察の医者のいつた「血が頭へ上つた」という言葉と、今日の医者のいつた「消化不良」という言葉を並べて思い出した。しかし腹も立たなかつた。いま母親の思つていたことは、生から死へ移つていつたわが兒を国法の外に支えることだつた。

屋敷のあとで父親が、親子三人で写真を撮りたいがいいかと警察の者に訊いた。「それは困ります。それは困ります。」とスパイがいつた。

「困りますつて、撮つてはいけないんですか？」

「いけないというのではないんですが、許すというわけにもいけません。」

そこへ新しく警察から使いが来た。父親はとりあえず訊いた。「いまこの人にもいつたのだが……写真を撮りたいのだがどうだろう？」

全く同じことが答えられた。

「撮つていけないというのではないんですが、許すというわけにもいけません。」

「『上司の命令』ですか？」そして父親は臍^{ふく}抜けのように「フ、フ」と笑つた。

使いの者は用向きを切り出した。

「おとむらいのことですから……ちょっとですから……」

父親は連れられて行った。

しばらくすると今度は母親を連れに来た。

（何度行つたり来たりすることだろう！）

母親は疲れているのかいないのか自分でわからなかつた。

警察では父親に會わして葬いの打合せをさせた。いろいろ交渉した揚句、金を檻房の中の男から借りることが許された。

死亡診断書、埋葬許可証その他の届書類の手続がなされた。

それが済んで話が家賃のことに移りかけると附添いの者が横から口を入れた。

「ほかの話はいつさい遠慮して頂きたいのですが……」

二人は顔を見合わした。

「では、あなたの方は引取って下さい。それから村田さんの方はこれっきりですから。」

袖を引かんばかりであった。

母親は父親が扉の向うに消えるのを見た。

それは永久に消えるように思われた。

母親は、この二日間にした父親を逃がすためのすべての努力を思い出した。そのために母親は赤ん坊の手当の不十分になることも厭わなかった。それはみな徒勞に帰した。

母親の胸に赤ん坊と父親とに対する愛情が一時に蘇ってきた。それを人に見られるのを隠すために母親は黙りこくって帰って行った。

葬式万端は来てくれた父親の妹と葬儀屋とに任せた。

小さな箱の中に菰を敷いて寝かせ——頭が非常に重かった——じゅう、笠、杖、草履、足袋、おしやぶりを入れた。

母親は柩に入れたから、長いあいだ赤ん坊の口のはたを拭いていた。よだれみたいな黒い液が後から後から出てくるのだった。それは堪えられないばかりに臭かった。医者は胃出血だといった。それを拭きながら母親は大きな衰弱を感じ、しばしば絶え入りそうになった。

夜になって坊主が来た。

母親は警察の者のところへ行っていった。

「今夜はお通夜をしてやりたいと思います。それであなたの方にいて頂きたいのです。帰って頂けないでしょうか？」

それを言い終えると母親の眼から涙が落ちた。

「承知しました。」

家の中からはじめて警察の影が消えた。

読経があり、位牌のつくり方で相談があった。

赤ん坊にも誰にも別に宗旨というものはなかった。いろいろ話した揚句、父方は曹洞宗、母方は浄土真宗とわかつて、戒名は結局どつちつかずの「釈——童女」とすることにした。

小さな柩に添寝して母親は夜明けまで眠った。

十八日の朝九時頃、赤ん坊と母親と母親の義理の妹と三人、三哩一円の田タクを葬儀場へ飛ばした。

非常に寒い日で風が吹いていた。

事務所でいろいろの手続や説明を聞いてから、かめ、箱、白金巾の風呂敷などを買った。

柩は母親の手を去ってものはや完全に火葬場の機構の中にあった。

火葬は夕方を待って始められた。

七時ごろ骨揚げをした。

十五日、十六日、十七日、十八日。

生まれて八ヶ月目にこの赤ん坊——その中にいつさいの罩められた微粒子——は、焼籠の四等で焼かれ、煙となって空へのぼった。

それから四日間、母親は、今は自分一人になったがらんどろの家の中で——食器その他の調度を除いて殆どいつさいが没収されていた——警察と差配と暴力団の強迫とを一身に受けた。

四日目に母親は、父親が十八日の朝繩を打たれて行ったことを聞いた。

母親は家を引払い、仕事の中にはいつて行った。

仲間うちで赤ん坊の追悼会をやろうという話が出た。日がきまつた。だが、その前の日に主催者側の者らが予備検を喰い、当日会場へ来た者らはその場で喰った。

四月十日、記事解禁になった。

日本共産党の話はよかれ悪しかれ流行病のように広がっていった。

ある日やられた者らの家族の集まりがあった。

巡査の方が数が多かった。

会合は、ただ足に鎖が結えられてないというだけの自由さで進められた。

やられた者らの父親、母親、女房、子供らがお互いに顔を見、話し合った。

一人の子供がいたいけな声でとぎれとぎれに唄った。

オソデハヌレテモホシヤカワク

アメフリオ月サンクモノカゲー

オ馬ニユラレテヌレテユクー

人々は泪ぐんだ。

その子供は唄うことを禁止され、会合は解散され、人々は検束された。

「女、来い！」

母親は高等の前に呼び出された。

高等は椅子に腰かけてじろじろと見上げ見下ろした。

「お前は村田の女房か？」

「そうです。」

「名前は？」

「村田ふく。」

「村田なに？」

「ふ、く。」

高等は形相かようそうを変えた。

「ふ、く。何だ、それは？ そんなことだから検束されたり、監獄へぶち込まれたりするんだ、馬鹿。」そして吐き棄てるようにいった、「それでよく人の女房が勤まるな。」

母親が答えた。言葉が口から出るのにつれて顔が蒼くなっていた。

「わたしらは労働者ですから、金持ちのお嬢さんのような教育は受けておりません。これで十分女房の役が勤まります。」

高等は持っていた鉛筆を放し、椅子から腰を上げ、非常に大きな平手打ちを母親の左頬ひだりほおにくれた。

大きな手型が顎あごから瞼まぶた、眉の上へかけて赤黒く浮き上った。

「はいれ！」

夜おそく母親は留置所を出た。

寒い風が吹いていた。

母親は帯をきつく締めて、凍こついた道を急ぎ足に帰って行った。

ある四辻で彼女は一塊りの学生からピラを渡された。

——日本共産党を天に代って膺懲ようちやうせよ！

——拓殖大学学生有志……

……………

母親はそれを破って棄てようとしたが、思い返して四つに畳んで帯の間へ入れた。

帰ると未決から手紙が来ていた。

最近差入れの書物に大きな制限が出来て読みたいものが絶対に読めなくなつたこと、だから書物の選択のために今までのようにいろいろ考える必要がなくなつたこと、などが書いてあった。

「早く出て仕事につき、また友子のおとむらいもしてやりたい。」

母親は封緘ふうけん葉書を持って来て返事を認め始めた。

強い風が吹いてそれが部屋の中まで吹き込んだ。

もはや春かぜであった。

それは連日連夜大東京の空へ砂と煤煙ばい煙とを捲き上げた。

風の音の中で母親は死んだ赤ん坊のことを考えた。

それはケン粒のように小さく見えた。

母親は最後の行を書いた。

「わたしらは侮辱の中に生きています。」
それから母親は眠った。

(一九二八年八月「戦旗」)

* * *

眼のなかに

眼のなかにまっかな斑点があらわれた
青味をおびたうす黄いろの白地に
朝やけのように美しくかたまっている
しくしく泣いているようだ
がらすのすばいとして辛い目薬をたらし
しずかに見ていると
女を愛するような哀しい思いが湧いて来る

挿木をする

今日は三月二十三日
仄かにこな雪がちらついて
あたたかな春の彼岸の中です
おいで妹たち
僕らは挿木をしよう
祖父さんやそのまたお祖父さんたちがやったように
今日はほとけの日で挿木の日だ
雪は僕らの髪の毛にかろう
そして挿木はみずみずと根をさそう

(「中野重治詩集」より)

鉄の話

——縄を誰の首にかけるか——

一 鉄が福井県から出て来た

この春温泉村の蘆原で水道敷設の問題がおこり、地主が村会を占領したとき鉄らはそれを包囲して逆に占領した。

地主らは叩きつけられてぎゅうといった。しかし火の見の梯子に登った鉄らは何とか罪で福井の監獄に六ヶ月叩き込まれた。公判で求刑された刑期よりも未決の方が長かった。鉄は控訴した足で東京へ出て来た。

俺たちは久しぶりで一しよに飯を食い話した。話しているうちに俺は鉄がすばらしく立派な字を書くのを思い出した。俺は鉄を昔から知ってたが、奴がこんなうまい字を書くとは未決から来た手紙を見るまで知らなんだ。

俺は感心していった。

「お前は恐ろしく立派な字を書くんだな！」

鉄が笑いながら答えた。

「そうさお前。これで御前揮毫ごぜんゐごをやったことがあるんだ。」しかし急にしかめつらで吐きすてた、「ふん、御前揮毫か……」

二 そして鉄が話し始めた

俺が小学校の五年生の時だからもう十五年になる。皇太子殿下の行啓があるというんで、大騒ぎが持ちあがった。

「堂様——俺の方ではお宮のことを堂様という。その堂様の改築じゃ。」

「村道の修繕じゃ。」

「記念樹の植えつけじゃ。」

「何じゃ。」

「かんじゃ。」

それも麦秋で大忙しの最中だ。そんなら俺たちの村が行啓の道すじに当てるんか？ ちっとも当っちゃいない。キクノゴモンの車のお通りになるのは、郡役所のある町で、村から行くには一里半歩いて四里汽車に乗る。

こないだの御大典の時も佐賀県東松浦郡のある村で御大典記念村社改築の騒ぎが持ちあがった。年貢も納められず税金も出しきれない百姓に、一戸最低二四の強制寄附をやらせようというのだからたまったものでない。しかし相手は何しろ御大典だ。村長と村会と各部落の有力者とおまけに警察だ。

ところでその村にくつつかの共同風呂場がある。その共同風呂場の羽目板に、一夜のうちにベタベタとポスターが貼りついた。

「村社の改築も悪くなかろう。しかし、娘や牛の身の代金で建てたのでは神様がお喜びなさるまい。」

村長も村会も警察もあつたものでない。村社改築案めさばざと流れやがった。ウガヤフキアエズノミコトがさぞ安心したことだろう。

ところで十五年も昔の俺の村だ。首の太い若手の連中が、二三尺も積った雪の峠をこえて座談会にまわってつれてる今とわけが違ふ。

堂様も改築するし村道も修繕する。吸われて嘗められてしゃぶられたのだ。だから行啓直前の村一帯ときたら、出の悪い井戸ポンプみたいにギシギシきしむだけで水は一滴も出やせん。そういうまん中へ持ってきてこの俺の頭にすばらしい名譽がおつかぶさつてきた。「郡下何千の学童のうちから選ばれて御前揮毫の栄になる。」ことになったのだ。

親父とお袋とは、怖ろしきで慄えあがった。それからさかんな喧嘩をおっぱじめた。

お袋は主張するのだ。

「そんな要らんつきあいはいせんでもいい。」

親父がそれを叱りとばす。

「並みのつきあいでないというがわからんか！」

「そんなら何じゃ？」

「天子様の前で字を書いて御上覧に入れるんじゃ。」

俺が横から口を出す。

「天子様でねえ、皇太子殿下じゃ。」

「皇太子殿下は何様のこっちゃ？」

「天子様のお息子さんじゃ。」

「別に違わん。」そして親父は更に勢いづいてお袋に怒鳴りつける、「わかったか、この役立たず！」

だがお袋は黙っているわけにいかぬ。

「そつでも川田の檀那の話でや、下駄も買わんならんし、袴も買わんならんし、シャッポも買わんならん。正月の下駄も買うてやれなんだを、袴やシャッポをどこで買いういの？」

かわいそうなお袋はしかし更にその上を発見した。お袋は泣き声を上げた。

「そうじゃ、まだ汽車賃がある！」

要するにしかしお袋は負けた。いらんつきあひも時世時節で仕方がない。ただ二人とも次ぎの点で一致した。

「なんせ話が板野先生と川田の檀那から出てゐるんでそれが心配じゃ。」

三 先ず板野先生から始める

板野先生というのは俺の受持ちの女先生で実に厭な奴だった。

こないだ御大典で殺された三重の大沢君も小学校の先生だったそうだが、先生にもいろいろある。

この女先生から俺はさかんにしつぺを喰った。はじめて喰ったのは今でも覚えてゐる。

ある日板野先生が命令した。

「ラリルレロを書きなさい。」

俺は一分たためうちに紙石盤の上に見事な一行を書いてのけた。

右隣りの（俺は列の端で右隣りしかなかった）滅たらしはどうかというのと、奴の石盤はまだまっ黒だ。そのうち奴さんはやつとことごと書いた。

「ラリルレロ」

俺は気がでない。今に板野先生が「さあ手をおろして」という。草履を曳きすりながら列の間を覗き込みに来る。これには間違いない。俺は左の眼を教壇に向け、右の眼を右隣りの小僧に向けて、つぶし声で教えた。

「馬鹿、レのハネはあっちじゃが……」

それが「エノアネワアツチャ」というふうに響いたのだから、俺はたまげたしその小僧はまごついた。俺の左の眼が教壇に向いてるはずもない。揚句がしつぺだ。

そのしつぺがまた非常に利いていた。先生がつかつかと降りて来て手を振りあげたとき俺はもう観念していた。それでもこれほど痛いとは思わなかった。その痛さが実に侮辱的に感じられた。

ジーンときた頭の中で俺は誓った。

「泣くな、ドス女郎！」

この「ドス女郎」には後に復讐した。四年生になって（四年生まで女先生がついてくることは普通でない。俺の時はこの板野先生が五年生までついてきた。山の中の学校で教師が足りなかったのだろう）ある日読本の中に「塩梅」という言葉が出てきた。たまたま川田の檀那が参観に来ていた。俺の組に川田の次男がいたのだ。先生が訊ねた。

「アンバイ……というのはどういふことでしょうか……誰か？」

誰も手をあげなかった。

「アンバイ？ そんなこと馬鹿でも知ってるわい。」

学校というのは何でしょうか？ それは物を習う所です。風というのは何でしょうか？ それは吹くものです。しかしアンバイ？ 「聞くんでもいいこっちゃ。」

とうとう先生が教えた。

「塩梅というのは塩加減ということですよ。」

塩加減！ 俺たちは呆れ返った。

「先生ッ。」

俺が手をあげた。

「そんなら、家の病気で寝ているあんちゃんに塩加減が悪いんですかいね？」

滅たらしどもがこの話を家へ持って帰って字の読めないお袋に訊ねた。

「ほんとに塩加減でことかいの？」

「大方そうじゃろぞいや。」

それがとんでもないことになった。

まず俺が級長を御免になって川田の二男坊が代った。（俺は三年生からずっと級長をしていた）それはしかし、川田の次男坊はエコヒキなしに二番ではあったのだから何でもなし。何でもあったのは次ぎのことだ。

「川田の檀那が何でサンカンに來たか、お前知ってるかえ？」

「知らんで！ 嫁見に來たんじゃが。」

「何で先生を嫁に貰うんか、知ってるかえ？」

「知らんで！ 嫁に貰うたつて先生なら雑用（ざつよう）が要らん。月給は家へ持って帰る……」

洩（も）つたらしどもはお袋やなんかから聞きかじつたことをろくにわけもわからずに喋り散らしただけだったが、それが本当だった。生徒の大喜びの噂は、次男坊、板野先生、川田の耳へつづけに聞えた。板野先生の縁談（早稲田大学を卒業した川田の長男との）は何とか纏（まと）ったが、俺の家に対する川田の虐め方はそれ以来ずっと手厳しくなった。

四 だが川田の話に移ろう

川田というのは俺の村の大地主で、よくあるように地主であると同時に唯一の地主だ。村全部が彼の小作人で、自作農でも川田の田を一枚も作ってないというのは一人もない。こういう地主がどんなことをやるかお前も知ってるだろう。

俺の村へ電燈が來たのも、輕便鐵道がついたのも、耕地整理をやったのも、村道を県道にしたのも、村民の反対を無視して小学校を移転（うつりか）したのもみんな川田のためだ。明治維新の時こいつは金を出して土族を買った。だから村でこいつだけ平民でない。そのほかに彼は県會議員で、信用組合の組合長で、バクチを打つという評判のある根本という男を倉番頭（くらばん）にしている。この男が、また川田の倉番頭であると同時に県の任命した米の審査員なのだから世話はない。

この川田というのは以前鷺淵姓を名乗っていた。それが五六年前に川田と改姓したのはこういうわけがある。

「むかし南北朝の時代に南朝の遺臣に川田というのがあった。朝敵に敗れて俺の村に土着したが、北朝の力から逃れるために姓を鷺淵

と改めた。現在の川田村という名称はそこから出ている。（俺の村は川田村という。）今や大正の御代となり本来の姓に立ち返るべき時となった。ここに今日以後鷺淵家は川田姓を名のる。」

これが粘板岩か何かに刻まれて川田の持ち山に堂々と建ってるのだから、呆れかえつてものがいえねえ。

ちようど行啓のあつた前年の暮れだ。

お歳暮の日の夜で、俺の家のような家ではどこも咳一つしなかった。お歳暮に川田は小作人一統を集めて夕飯を食わせる。その夜小作人一統は怖しきで縮み上る。その席へ川田の檀那が出て来て挨拶をするのだが、その模様で年貢米の率を測るのが小作人たちのならわしなのだ。

暗い手ランプの下で、俺とお袋とは藁繩（わらづな）を纏（まと）っていた。土座の隅（川田以外に畳のしいてある家はめつたにない。大抵の家は土間のたたきの上に藁と糶（か）がらとを三寸くらいの厚さに敷いて、その上に藁を敷いて寝起きしていた。「畳敷き」「板の間」に対してそれが「土座」だ。）に山形に積んであるのは川田に納める御上納の米で自分のものではない。納戸寄りの妻戸の下には「塩梅の悪い」兄貴が三年越しに寝ている。この兄貴は評判の孝行息子だったが、ちょうど、三年前の耕地整理の時、冬稼ぎのトロッコ押しに出てトロがトソボして胸を怪我した。そこへ風邪を引き、それが肺炎になり、それがこじれて寝ついてからは癪癪ばかり起していた。医者にも見せられず（医者はたまに川田へ来るだけだ）。売薬など効くはずもなし。いぶん俺の好きな兄貴だったが見るも厭なほど衰弱していた。親父はなかなか帰らなかつた。藁繩が一段落ついたので、お袋は白を立てて豆挽きの用意にかかった。

「遅いのお。」

「遅いなあ。」

その時力チャカチャッという下駄の音がしたかと思うと、何か大声で怒鳴り散らしながらペロペロに酔っぱらって親父がのめり込ん

で来た。

「わつらが意気地がないんじゃ！」

近所の男どもが「まあまあ」と抑えておよその話をした。

酒になつてから檀那が出て例年通りお説教を始めた。何かのきつかけで、話が「家の嫁女」の板野先生（もちろん今では川田先生になつていたが）に移り、いつかの学校の話が出てひどく厭味に俺の親父に當つてきた。無理な話と思つたが、小作人のことでみんな黙つていた。そのうち川田が「何とかかとかあ……」といつて怒鳴りつけたひと言で親父が顔を上げた。

「何じゃ。檀那々々と奉つてれやいい氣になつて。御維新のとき、人の田地田畑を書き換えて士族になつたを村のもんが知らんと思つてゐるか？」

座敷じゅう起ち上つた。誰かが箱お膳を包んで押し出してやらなかつたらどうなつたかも知れなかつた。ぶんぶんして、それでも納得して出て行つた。足元が危いので誰か傍へ寄ると、「要らんことせんな！」と握り拳をあげたのでその男は敷台の所でハラハラしながら見ていた。

案の定、五間も歩かぬうちに親父はしたたかにけつまずいた。すると親父は俄かにくるりと向き直つて、出たばかりの川田の家へ逆に駆け込み、玄関先に立ち足ばかりさま血相かえて怒鳴りつけた。

「敷石の笏谷までなめてけつかる！」

声と一しよに箱お膳が風呂敷ごと飛んで、拭き込んだ帯戸がつばの残りものでべつとりとよごれた。

そのとき親父はもう薪小舎から薪割りを担ぎ出していた。声を立てて逃げ腰になつたものもいた。親父は薪割りを提げてさつきけつまずいた所まで歩き、振り上げておいて叩きつけた。

「ええちきしよ！」

笏谷石が微塵になつて飛んだ。

聞き終るとお袋は泣き出した。

「まあ、どうするつもりじゃろ！」

年貢納め前でたださへ陰気な家の中が翌日からすつかり滅入つてしまつた。

「ああ、ああ、檀那衆と小米とは昔から仇同士じゃ。どんな目に仇を取られるやも知れんぞね。ああ、ああ、あの米もどうなるやら。もう何しても駄目じゃ。」

親父が恐ろしい剣幕で叱り飛ばした。

「黙らんかい、あほう！」

兄貴はものもいわず、俺はおどおどと薙縄を綯つた。別にどうもなかつた。

五 そしてサギツチヨが来た

サギツチヨというのは子供の祭で、村じゅうから新薬を集めて堂様の庭にコヅミを作り、男の子は自分の書いた紙幟を男竹の先に、女郎の子は三角の紙袋を女竹の先に結いつけ、それをコヅミにつき挿して、村じゅうのものが寄り集まつてそのコヅミに火をつける。紙幟は燃え、三角袋は破れて封じてある色紙が散り、そこで男の子は手があがり、女郎の子は針仕事が上手になるというのだ。

俺は大人どもが順々に幟の字を褒めるのを聞いていた。中折紙五枚つぎの俺の幟に来た。

「うまいもんじゃなあ！」

「うまいもんじゃ。」

「鉄が書いたんかいな。ほんとに？」

「さあな？」

「兄貴坊が書いたかも知れんぞ？」

「さあな？」

「ふん……」

何かひとこといってやろうと俺は腰を上げた。その鼻先へ、例の